

流行語 木野 工

流行語、つまりハヤリコトバというのは時
代を微妙に反映していて、まことに面白い。

どういう機縁で、そのコトバが生み出され
独特の雰囲気と情感を表現し、どんな時に、

どのように使われてハヤリコトバとしての機
能を發揮していたかは、僅か数年、近頃のよ

うにコトバのハヤリスタリも、テレビの流行
物なみにスピードが速くなると、三月か、せ
いぜい半年もすると、さっぱりわからなくな
って、意味さえ通じなくなるものも多い。

昭和四十八年末現在、私の周辺では、TV
の研ナオコ、愛川欽也が組んでいるカメラC
Mが大流行で(このCMは秀作である)『に癡
づてる。しかやらない。だから、やらない』
と、大いに活用している。こんな具合であ
る。

「原稿あがったか」

「短い、もう一本ですむ」

「バイー、やるか」

誘われた若い記者はデートの約束がある。
体よく断るのに、かつては苦勞した。今は、

「僕は近頃ヤキトリに癡づっている」
「それじゃ、新橋へ行くか」

「ただし、特級しか飲まない。だから、君と
はつき合えない」

研ナオコの大口あけてゲタゲタと笑う表情
と、キンキンの『美人しか撮らない。だから
シャッターを押さない』というCMを知らな
い人には全く通じない。それでも、このやり
とりは流行している。いかにあのCMを多く
の人が興味を持って見ているかという証拠で
ある。

しかし、現代のハヤリコトバは、男と女、
子供と大人、サラリーマンと家庭人、中央と
地方の差こそ少なくなつたが、極めて局部的
だ。それもコトバ過剰の現代の特色の一つで
ある。

ハヤリコトバに興味を持ったのは、妙な機

会に明治以来の『流行歌——ハヤリウタと読
んで戴きたい。リュウコウカと読み出したの
は昭和も十年近くたってからのようである
——』について書く必要が生じ、そのついでに
流行語も追つてみただけのこと、文学的に
も言語学的にも、実にいい加減なものであ
る。明治百年記念で出版された年鑑類を多少
漁つてみただけのものである。

『七つ道具』が明治五年。もちろん家具製
品ではない。新聞紙・郵便・瓦斯灯・蒸汽船
・写真絵・博覧会・軽気球の七つで、文明開
化の国家的な象徴であつた。翌年に早くも
(同義語は有史以来あつたと思うが)『血税』
が全国にハヤリコトバとして流れひろがっ
た。地租法が改正された年である。同七年
『有司専制』これはこの十二月に入つてから
朝日も読売もコラムに使っている。中国でし
きりに使われているお流れらしい。同十三年
の『紳商』も今年あたりは出て来そうなこと
ば。『女権拡張』は同十五年。同十八年の
『馬鹿車』は自転車のことだったが、自動車
の意味で復活させると面白い。『フハッショ
ン』は現在のファッションと同じ発音で、こ
れが明治十九年に大流行だとある。『インフ
ルエンザ』初出は同二十三年、議会制とも

に流行性感冒も外国から入って来た。日清戦役で『臥薪嘗胆』を事あるごとに聞かされる。こんどは『石油戦争』で聞かされるか。

日露戦役直前に『非戦』が庶民にまでよく使われ『人生不可解』も流行した。この語で幸徳秋水と藤村操をすぐ連想できる人は、相当な勉強家が停年退職のご老体になってしまった。しかし、息を吹返しそうな語呂のいい言葉である。『軍神』は二次大戦の所産ではない。非軍歌『戦友』とともに日露戦役が生んだ当時の流行語。戦争が終ると『増税』に次ぐ増税で、言葉の出来たのは同四十年。翌年『浮華軽佻』がやたらに活字になっている。

昨今はガソリン欠乏をおしてマイカー遠出をする連中、ろくに貯蓄もないのにダイヤを買ってインフレに備えるカミさんたち、やたらデパートへ集るOL諸嬢、トイレペーパーで店員を殴った猛婦も出る買漁り、しきりに『軽佻浮薄』と語を改めて使われる。

大正に入って、元年『新しい女』フリー・セックスだけを主張する気配のある現代とは雰囲気が少し異なる。大正五年には、現代の常套語『是々非々』が男女の痴話喧嘩にまで侵入していた。『人道主義』もこのころの産。同

七年には現代の狂的英雄『過激派』がすでに

登場。米騒動などのあった年である。翌八年にはインフルエンザとしゃれていたのが『流感』とすっかり日本になじんで、風邪とも

にコトバも流行。同九年には、私個人の好みなのだが『熔鉱炉の火は消えたり』が流行した。ガス欠の節約時代、今年あたり『……消えたり。まっすぐ家へ帰るか』などと夜行族のぼやく年にならねばいいが。同十年、文相失言で『二枚舌』いまはどれもこれも二枚舌

だから、流行語にならない。『赤』と左翼人ばかりか自由人をも蔑称したのは大正末年あたりからで、意外に歴史は浅い。

昭和に入ると、現在も生きている流行語がぐんとふえて来る。大流行したコトバは、意味を変え、使い方を変えて、何かあると流行し始めている。『銀ブラ』は昭和五年、同一年に『ルンペン』失業保険法が雇用保険法に拡大改正されて失業時代に備え始めているが

超完全雇用時代の若いひとに『大学は出たけれど』昭和五年ごろは職も無かったなどと言っても、意味が通ずるかどうかさえ危ぶまれる。失業者が出始めると、とたんにパニックに陥るのではないかと貧乏日本時代を知らぬ若者たちが恐い。『非常時』は五・一五事件

和七年の流行。特高が大強化されて、恋愛小説を読んでいてさえ「非常時を弁まげんバカ者ッ」と怒鳴られた。夫婦でさえ手をつない

で街頭を歩くなど『トンデモ、ハッポン』反軍、反政府は死を意味した。研究室で、利根川先生と金大中事件の話をしていたら、先生が唐突に、大きな声で「田中角栄が下らん政治家であったとしてもですよ、とにかく、議

会制の国はいいなア、民主主義はいいなア、何でも言えるってことは、実にいいなア」と叫ぶように言ったことがあった。私は、思わず笑って「そうですねえ、いいですねえ」と

応じたが、この実感、戦中派でなくては共感できないのではないか、とも思って、ちょっと悲壮になった。非常時はこの後十年たつて復活し、いままた生き返って来た。いやな流行語、恐い流行語のひとつである。

戦後の特徴は、意味のない、外国語に翻訳しようのない流行語がやたらに出たことだろうが、こんなのは永く生きていない。生き永らえるのは、やはり社会と深く因縁を持った言葉である。その意味では、「世に連れ」るのは歌ではなく、歌詞であり、コトバであると言ったほうが適切かもしれない。